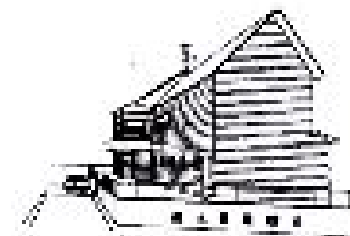


**<今週の聖書から>** 創世記3：19に“あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る”という御言葉があります。つまり、人は生涯を終えた時、土のちりに帰り何にも生きていた痕跡すら残さない、という理解でしょう。私たちの身の回りでいえば、日本の神道に、このような理解を見ることができます。けれども、民衆に広まった仏教では“極楽での安らぎ”というものを“この世の辛さ”と比べて思い起こし、この極楽に期待しようとする色彩が強くなっています。この世における“仏の慈悲”という思いはありますが、いずれにしても、“死んでからのこと”というところに結びついています。キリスト教信仰においてはそうではなく、“永遠の御国を継ぐ者”と私たちはされ、今もその世界に生きているという事実信頼しています。旧約聖書の特に初めのころには“死人の復活”という信仰を見ることはできません。しかし神は“わたしはアブラム、イサク、ヤコブには全能の神として現れたが、主という名では、自分を彼らに知らせなかった(出エジプト記6：3)”と語っておられます。またエリヤは“アブラム、イサク、ヤコブの神、主よ(列王18：36)”と語ります。主は“私はアブラムの神である”と語られ“であった”とは語られません(出エジプト3：6をイエス様は語られます)。それは今日に及んでいます。そして“御国”は今も私達とともにあるのです。信仰者に、次々と広い世界が聖書を通して示されて行きました。今朝の個所に出て来るサドカイ派の人々は、主の律法としてモーセ五書(旧約聖書の最初の五つ)を信奉していました。議論の為の議論をもってイエス様の教えの矛盾をはっきりさせようとしていることが分かります。復活を否定するサドカイ派の人々が、“復活した場合に”と切り出していることがすでにそのことを示しているのです。これらの議論の記録はすべて、私たちの救いの為にあることを思い出しましょう。規則の話に対して、イエス様は旧約聖書が啓示している神様の力の全能なることをもって臨んでいます。事柄は簡単です。信仰者は神とともに生き、神によって生を支えられているので、神様が生きられる限り、父祖たちに始まる信仰者の群れは、そのようにこの世を生きている者たちの神様なのです。肉体の死に断ち切られない、完璧な“全てが祝福の源にしかないえな世界”へと、礼拝を通して、私たちが招かれていることを否定してはいけません。

# 週報

2009年 11月 8日



伝えよう 救い主を  
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

## 清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	<a href="http://kusanagi.church.jp/">http://kusanagi.church.jp/</a>	

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail [grace@big.jp](mailto:grace@big.jp)